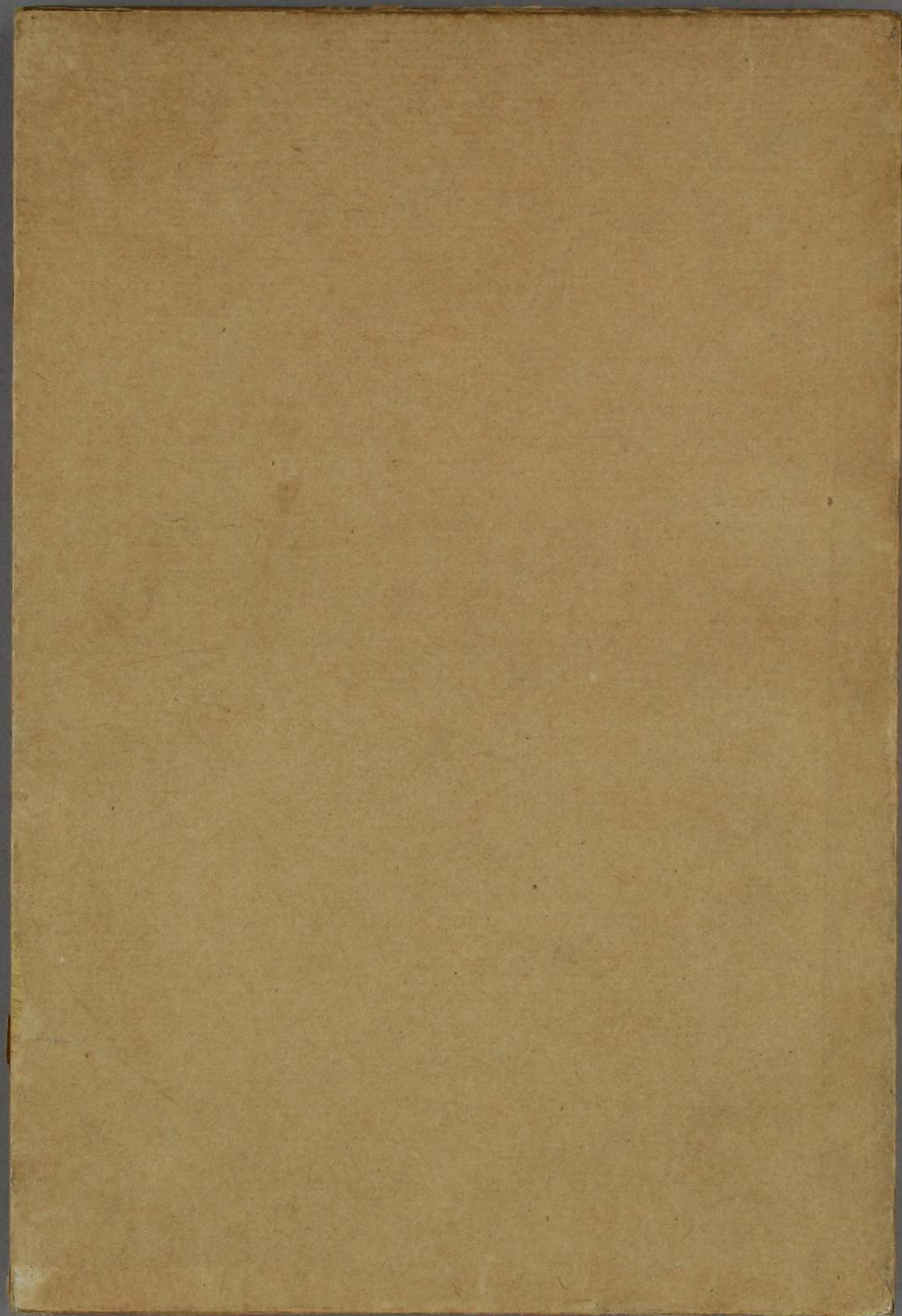


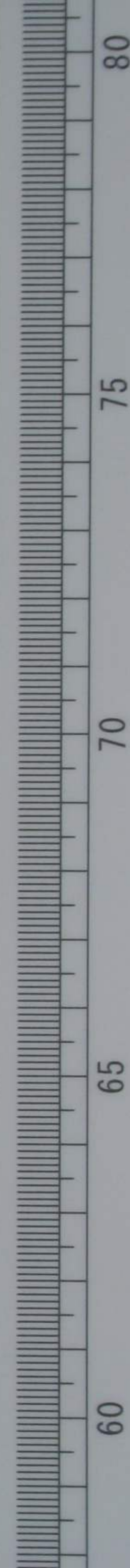
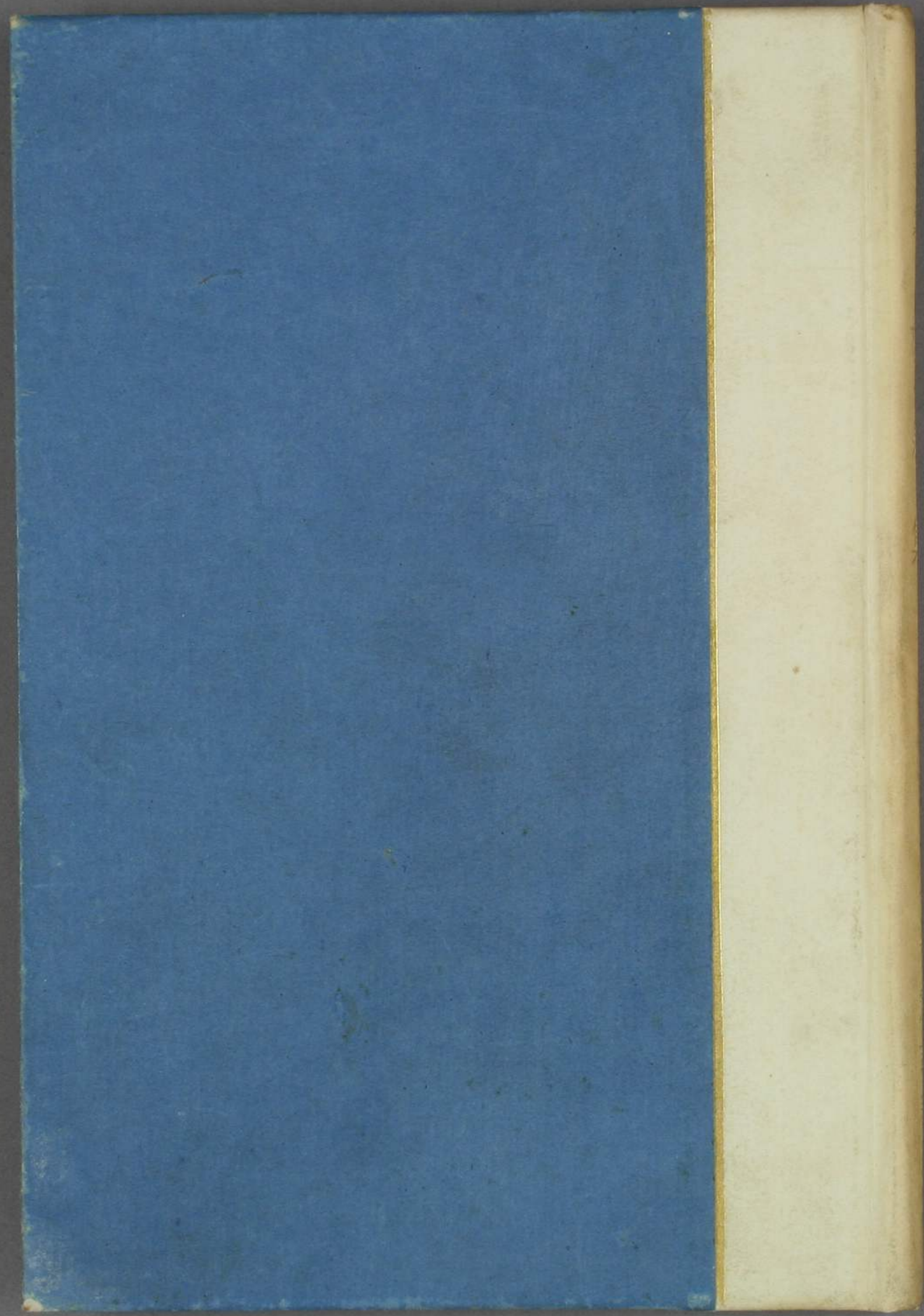
歌集林

泉

集

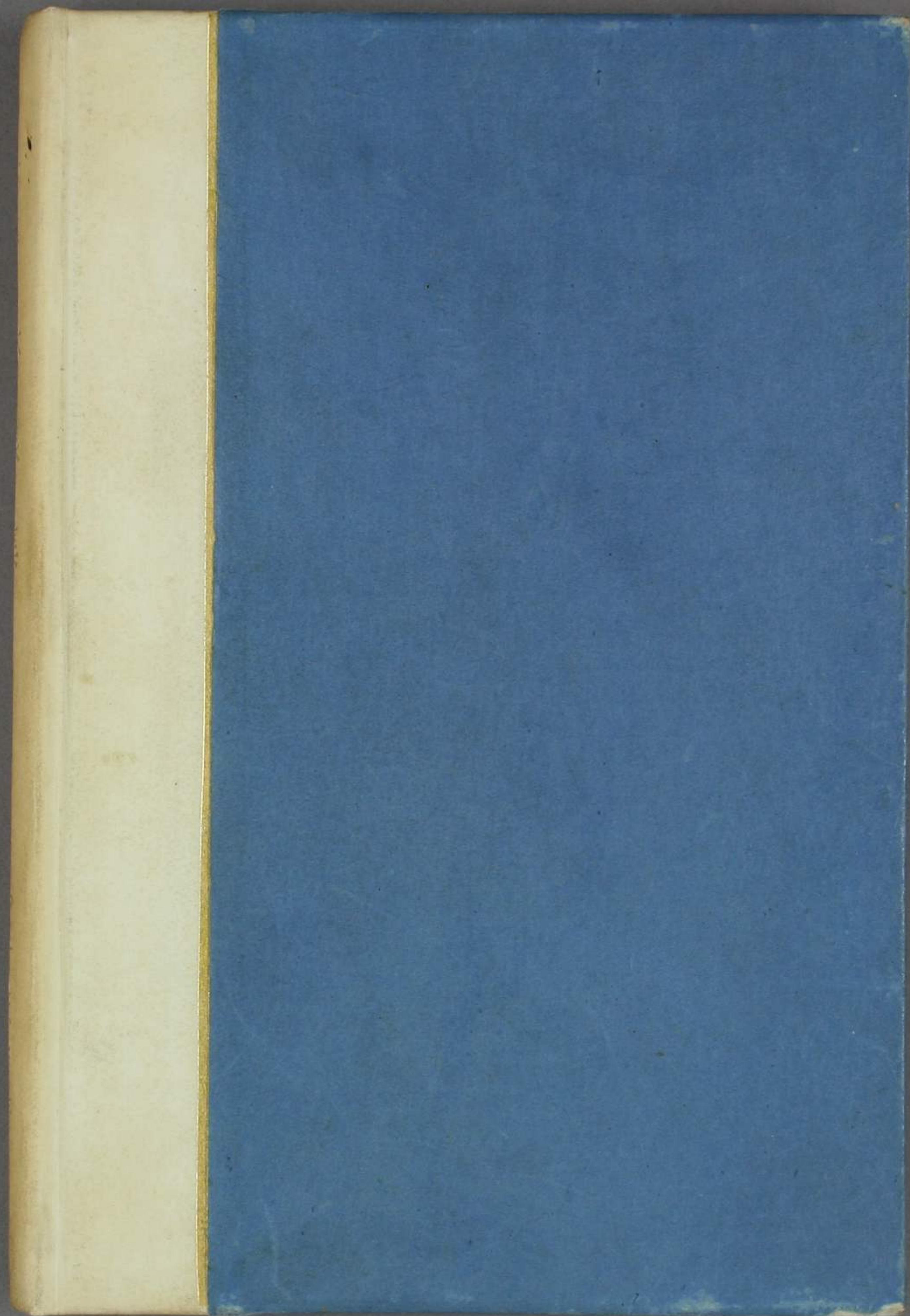
中村憲吉著

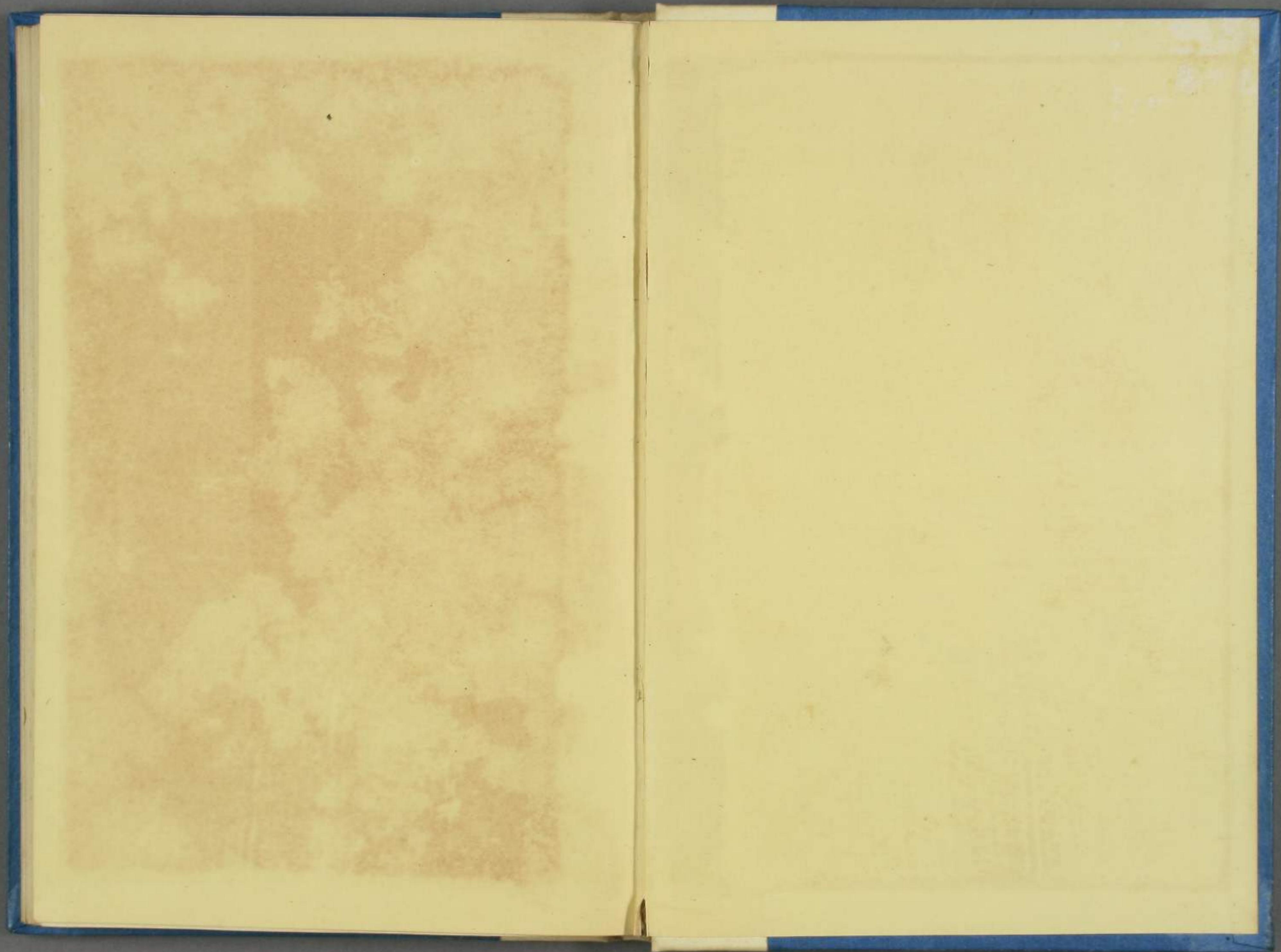




歌集 林泉集

山村無言著





中村憲吉著

(アララギ叢書第六編)

林泉集

東京根岸短歌會  
アララギ發行所



林泉集目次

大正五年

1

磯の光(三十四首).....	一
向日葵花(十一首).....	二四
青靄の夜(八首).....	六
星の尾(二首).....	三
槻の道(十七首).....	三
綠蔭製藥(八首).....	二六

青臭(八首)……………三  
 草刈舟(八首)……………三  
 水の音(八首)……………三七  
 暮春より初夏へ(十三首)……………四〇  
 藤なみの花(五首)……………四五  
 春の鴉(十六首)……………四七  
 椿の嵐(五首)……………五三  
 悼長塚節歌(四首)……………五五  
 磯の墓原(十四首)……………五七  
 雉子(五首)……………六三

大正四年

紅梅の門(五首)……………六四  
 蟬(二首)……………六六  
 構橋晚景(十六首)……………六九  
 千鳥橋(八首)……………七五  
 倉庫街(五首)……………七九  
 晝の燈(八首)……………八〇  
 草木發芽(八首)……………八三  
 峽の晝(五首)……………八六  
 左千夫翁追悼歌(十首)……………八八

新月(二首).....九三

浅宵裸馬の列(十一首).....九四

寒潮堀(二首).....九八

大正三年

眉間の光(十首).....一〇一

蒼き渚(七首).....一〇五

新緑の海岸(十四首).....一〇八

篠懸樹のかげ(五首).....一一三

春霜(二首).....一一五

松の芽(二首).....一二六

梅雨渚(二十二首).....一二七

霧の海(五首).....一二五

洲崎附近(十四首).....一二七

鏡壁(十一首).....一三三

四日月の光(八首).....一三六

峽驛の葬禮(二十首).....一三九

烏柵の霧(二十四首).....一四七

栗の花(二首).....一五七

山峽夏雑詠(十一首).....一五七

街上雑詠(十四首).....一六一

病院の庭園(十四首)……………一六六

棺車(十一首)……………一七一

含み言(二十二首)……………一七五

桃畑(二首)……………一八三

中宿(二首)……………一八四

大正二年 附二年前

ゆふべ(十四首)……………一八七

墓地の灯(八首)……………一九二

榛紅葉(八首)……………一九五

鳳仙花(二十二首)……………一九八

林泉集目次終

赤き宮(八首)……………二〇六

金葉(二首)……………二〇九

鴨(十四首)……………二一〇

椿(十一首)……………二一五

柑橘の庭(八首)……………二一九

麻の香(六首)……………二二〇



口 繪

夕川の馬……………平福百穂

四色版……………日能印刷所

挿 繪

墨田川口……………平福百穂

湖の女……………平福百穂

寫真版……………日能印刷所



口繪

夕川の馬

四色版

平福百穂  
日能印刷所

挿繪

墨田川口

湖の女

寫真版

平福百穂  
平福百穂  
日能印刷所

大  
正  
五  
年  
(八月迄)

磯の光

一 岩かげ

身はすてに私わたくしならずとおもひつつ涙おちたり  
まさまさに愛あしく

もの思おもひおもひ敢あへなく現あつなり磯岩かげの  
うしほの光



わたつ海の後の岩のかけにして妻に言らせる  
母のこゑすも

岩かけの光る潮より風は吹き幽かに聞けば新  
妻のこゑ

磯潮のひかりを浴みて斯くのみ常に眞幸く  
あらんと思へや

みじか世のいのちと思へば漲らふ潮のひかり  
も在りがてぬかも

短か世のつまと思へばうら愛しひとりの時の  
涙しらすな

磯樫の樹皮こぼるる日のさかりおのづから悲  
しひとり思へば

4  
岩かげの潮のひかりを飽くまでに見し明らむ  
るたづき知らずも

磯潮は岩にひかりて堰かるれどせき敢へぬか  
も一人なみだは

みなぎらふ潮のひかりはおほけなし眼を開き  
て居て如何にわがせむ

二 壺 磯

來しかたの悔しさ思へば晝磯になみだ流れて  
居たりけるかも

5  
こし方の悔しさおほし低頭してなみだ流すも  
慰めと思へ

## 三 海の珠

あざろなき息をもらせり内の海八十島かけに  
水のひかれば

光る海の珠拾ひつつ磯かげの山かた附きて行  
かす母かも

磯を行くひまだに母はあはれなり我が新妻を  
愛しみたまへり

おほけなく涙おちたり生ありてあり磯の珠も  
母と拾へば

はしけやし母と妻とがむつぶ濱珠ひろふ間を  
岩がくり來ぬ

ひとり来てかなしき我れや磯の波光り沫吹け  
ばまして愛しき

小松山磯山かげの深き海思ひふかめて我れに  
寄りさや

たまさかに歡ぶわれと思へかも晝磯のうへに  
涙とどめざらむ

四 島の裏に來りて

山かげの海べを見れば松の間にゆふべ寂しく  
草を刈る人

ひた寂し聞きつつ居れば松山の夕海岸に草を  
刈る音

島山しまやまを下ればさみし隠こもりり江えのむかうに暮るる  
ふかき松山

山したに夕さりくれば潮ふかし人草をかりて  
山へ去りにし

このわたり家居いえは何處どこぞ草かりて磯松山いそまつやまに人  
隠こもりれたり

妹いもうととして山にて聞けばかすかなり山した海の  
ゆふ潮のおと

このゆふべ所縁ところえんはふかし山やまかげの深満ふかみしほを  
聞かざらめやも

離はなれ島磯しまいそにゆふ星ひかりそめ命いのちをもちて轉うたた  
さびしき

## 五夕潮

磯のうへに夕潮の香はほのかなり舟にかへれ  
ば外舅ひとりあはれ

舟の上によるこぶ人も眼になみだ酒にし酔へ  
ばもの思ひたらむ

いにしへの湊のなかの離れ島人すまぬ磯にひ  
と日くらせり

離れ島磯わにのこる夕光かつが妻が言惜し  
みける

山かげよ見ればか悲しゆふ潮の八重折る海は  
いまだ明かり  
(六月作)

## 向日葵花

おほほしく曇りて暑し眼のまへの大き向日葵  
花は揺すれず

曇り影すでに深かけば日まはりの大輪の花は  
傾きにけり

あからひく大向日葵のもとに立ち息づき餘す  
ふかき曇りを

おほほしき曇りのなかに向日葵のにはひは深  
くながれざりけり

ちかづきて曇りのふかき向日葵の大きなる花  
に顔を寄せけり

顔寄せてやや動きたる向日葵の大きな花は  
 熱あるをおぼゆ

くもりたる四邊を聞けば向日葵の花心にうな  
 る山蜂のおと

くもり日の音を少なみ立ちつくす眼にわづら  
 はし向日葵の花

なやましく漸く風の吹きたれば重くゆすれし  
 向日葵のはな

ちまたより埃にはひて流れたり曇りのふかき  
 この庭ぬちに

夏の土ふかく曇れりふところにて蟬を鳴かせて  
 童子行きたり (八月作)



## 青靄の夜

舗道ひだりの家壁やまのかげの青き靄あ夜よくだちながら人の居るころ

青き靄あちかくながれてわが息の長息ながいきにふかく慣なれがたきかも

あをき靄あながれて夜はふかけれど舗道ひだりの上はまだ乾かわきたり

乾かわきたるこの舗道ひだりに錢ぜにおとし四邊よたへにひびく靄あのふかきに

街なかに水欲みづほしくなり小夜ふかし乾かわける道を行いきがてぬかも

小夜ふかく路樹ろじゆに觸ふればうらがなし萎しよへし葉  
には塵たまりたり

霧ふかき路樹のとほくの灯あかりのあかり店閉とざす  
らん壘いを叩く音

街まちなかに風ふきたれば青あおき霧きりちかくながれて  
居ゐたりけるかも (八月作)

## 星の尾

宵ごとに空美うつくしくなりなりにけり尾しよをひく星の頻しき  
りにあはれ

わくらばに眼めにとどまれる夏の夜の星よりか  
なし値あひがたからむ (折をにふれて、七月作)

槻  
の  
道

大竝樹 槻よりわたる若葉かぜ我がはなひれば  
寂しくし覺ゆ

煉瓦家の深きかげ行けば若葉かぜ濃く吹き渡  
る 槻の大幹

槻わか葉さやさや映る煉瓦みち行きつつ我れ  
の素肌さみしも

槻竝の下かげ行けば煉瓦みち靴おと響くその  
家かげへ

蔭ふかさ槻の大樹の一ならび木柵に寄りて遠  
き人來も

高槻たかきの濃濃き芽芽をふけば赤赤れんぐわ教室けうしつのとは  
りは夏なつになりたり

あを青あおし槻きの竝なみ樹きの赤あか煉ねん瓦わ日の射さす壁かべは眼まなこに  
染しみいたし

槻き竝なみに風かぜふきしかば坂さかしたに若わか葉はかたまり光  
りたる見みゆ

ゆふ日ひさす槻きの葉はかけに教室けうしつは戸かどを鎖くわしたり  
深ふかきゆふ戸かどを

槻きの道みちゆふ日ひが霧きりればもの蔭かげに醫い科か大だい學がくの鷄けい  
なきにけり

夕ゆふまけて下したかげふかき槻きのみち下した枝えだにゆるる  
わか葉はすくなし

大幹の槻並なれば向う側やや先はくらく近づ  
く足音

使丁ひとり竝樹をよぎり夕まぐれ建物の壁に  
消えたるあはれ

教室のくらし戸口に人のかげ教授の車夫の待  
ち居るならむ

教室の槻の葉かげに燈火つき校内はふかく夕  
ぐれにけり

槻のかげ教室通りの夕扉よりひと出て行けり  
扉の締まる音

暗闇に星こそ見ゆれさやさやと槻の葉ゆるる  
頭の上に (五月作)

綠蔭製藥

若葉深くわが入り來れば製藥の匂ひはふかし  
わが眞近くに

薬にはふ若葉がかげに硝子窓ふかく鎖して家  
こもりけり

赤羅ひく晝にこぼせる薬液の烟れるならん匂  
ひつよきは

黄に揺るる若葉のなか眞日の照り薬のにはひ  
焦げ臭くおぼゆ

薬の香劇しく吹けばわか葉より綠素を吐きて  
吹く心地すれ

この路の眼めのかぎりなる若葉より緑素したたる心地こそすれ

製薬せいやくのにはひを嗅かげば群肝ぐんかんのころは痛む若葉わかばが中に

春ふかき若葉わかばかげより製薬せいやくの匂におひのするは寂さびしかりけれ (五月作)

青 臭

春すぎて若葉静かになりなりにけり此この静けさの過ぎざらめやも

眞日まひ透すきてわか葉かさなる深みどり匂におひしたしもわが衝つく息いきに

若葉かげ深きかげにて眼をひらきわが魂いの  
ち怪しく思ほゆ

我がいのち怪異に目覺めぬ深わか葉うつし身  
の肌はだに青くひかれば

潜まりて小鳥は啼けり深わか葉蟲のうまるる  
臭氣におを感じず

わか葉より小鳥墜ちつつ羽ふりて相交歡べり  
その下草したぐさに

若葉かぜ下かぜふけば帽子とりて汗を吹かせ  
ぬ現うつつならめや

わか葉蔭した風吹きてひたすらに目覺むるも  
のの限りあらんや (五月作)



## 草刈舟

おほ君の御城を見ればみんなみの御ほりの岸  
に草長けにけり

五月雨の草しげれれや大御城み濠に居りて草  
を刈る舟

みかほりに乏し雨ふり松のした漕ぎゆき濡る  
る草かり小舟

さみだれの御城の土手に愛しく人の居る見ゆ  
草を刈る人

五月雨の濠にゐる鴨けふは居ず草かり舟の漕  
ぎくだる見ゆ

み濠あまべに雨あま間まあぐれば草積くさみて棹さ差さしかへる  
ひとつ舟ふねかも

大おほきみの高たか宮みやがきの青あおき土手目つちにつくゆゑに  
貴うく思おもはゆ

さみだれの高たか宮みや垣かきの放はなちみづ落ちたぎつ見ゆ  
濠あまかげの水みづに (五月作)

水の音

この夕ゆふも夕餉ゆふけに寄りて父おや母ちちは山やました川がはをちか  
く聞きくならむ

夏なつされば布ぬ努ぬの峽はざまのふるき里さとふかく暮くれれつ  
河がは音ね清きよけむ

ふる里の布努の河瀬カセの夕のおと都に住めばう  
べ戀ひにけり

初夏の庭は樹ぶかく暮れにけり水のおとこそ  
聞かまく欲しき

街住居まちぢゆうわれは寂しも水のおと流るる音をきか  
ず久しみ

街住居まちぢゆう小家にすめば水道すいどうの夜の滴りみづも美  
しきものか

夏夜ふけ寝つつし聞きぬ水道のしたたる音を  
耳のちかくに

朝顔の苗植なむゑ居ればゆふぐれの遠きそらより  
雷震らいしんひけり (五月作)

## 暮春より初夏へ

春ふかく二階にに住みて忘れたり人のみな行く  
寂しき土を

たまさかに街に出づれば埃つくわれの布子の  
寂しく思はゆ

春埃はるぼこりいく日吹きたる道ならん今朝見れば地肌ちだ  
露れあられにけり

春埃すでに吹かざり街行けば樹のかげおほく  
なりにけるかも

舗道ひだりの竝樹なみわか葉に風わたり明るき街となり  
にけるかも

夏さればこの夕かげに風おほし芽吹ける枝に  
おほく渡るも

やや瘦せてわかき吾づまが丹の櫛たすきネルによる  
しき夏さりにけり

あから引く眞晝まひるの土に蔭おほし咲きて照りた  
る山吹の花

山吹の照りたる花が盛りなり隣やかたを見お  
ろしたれば

晝庭ひるにわに樹のかげおほみ山吹のしどろが花に風  
の渡るも

日けならべて春雨ふれば未まながく山吹の花は土  
に散りたり

このゆふべ街巷ちまたのうへに愛めづらしく夕焼ぐもの  
ながるる見るも

わが窓に散りて過ぎたる梅の枝かたき枝には  
若葉立ちけり (四月作)

### 藤なみの花

藤なみの花咲きにけり真木柱まきばしらわが新室にいむろの匂ひ  
佳よろしも

菅すがだたみ親しくねむる新むろの鉢ひちの藤なみ總ふさ  
とけにけり

新室に藤なみの花咲き垂りていく日しづかに  
籠りたるらむ

玉床の枕にちかく朝なさは少し散りたる床  
の藤なみ

日の暮れの障子あかりに埃吹き久しく思ほゆ  
床の藤なみ (四月作)

### 春の鴉

春あらし樹木の光りて塀のうへにくだれる鴉  
啼かざりにけり

近づきて塀のうへなる眞寂しき晝の鴉を見た  
りけるかも

光るかぜ現しけめやも近づきて大鴉をぞ見た  
りけるかも

街なかの埃しぬぎて來たるらん光りつかれて  
居る鴉はも

塀のうへに光りつかれて居るからす羽根の埃  
の寂しくし見ゆ

あかね刺す眞ひる明けれ大がらす眼ぢかく下  
りて啼かざりにけり

赤根さす晝に啼かざる大鴉もの忘れ人に似て  
したるものか

塀のうへに現つに光りくるぐると嘴ふとく啼  
かざる鴉



塀のうへに嵐光ればしかすがに苦しくは啼く  
か黒き鴉の

塀のうへに春日が霧ればうらがなし啼きたる  
鴉ひさしくは居ず

もの蔭の晝はしみらに寂しけれ埃がらすの久  
しく居るも

もの蔭の春し寂しも羽根のあと亞鉛の塀に鴉  
くだるも

春眞ひる物かげにして啼くからす數多はなか  
ずまうら悲しも

かさこそと亞鉛の塀に鴉くだり歩けばかなし  
その足癖が

樹の芽立ちあらしの吹けば晝鴉街べの樹木に  
啼くが乏しも

街屋敷となりの柱にからす啼き頻きては啼か  
ず眞日のひさしさ (四月作)

### 椿の嵐

洋館の椿をゆする疾ち風ピアノ鳴りつつ弾音  
はやし

洋館のむかしの庭に赤き花つばきは騒ぐひと  
来ざりけり

赤椿<sup>あかつばき</sup>はやちの中に光りけりピアノの止<sup>とど</sup>みしそ  
のたまゆらを

限りなく春の嵐に吹きゆする赤き椿は眼<sup>め</sup>を  
疲らしむ

葉がくりに蟲を求めて鳴く小鳥<sup>こどり</sup>秀枝<sup>ひでえ</sup>に向きて  
鳴き移る見ゆ (四月作)

### 悼長塚節歌

春雨の東京驛に骨殖<sup>こつがら</sup>となりて着<sup>つ</sup>きたりあはれ  
節<sup>ふし</sup>は

きさらぎの筑紫<sup>つくし</sup>の濱の松ばらに松葉ふむ音を  
ききて死にけむ

春さむし根岸養生園に妹まつと椿のつぼみ見  
飽かざりしか

長塚の節おもへば霜しろき柿の秀枝のひとつ  
雀あはれ (三月節追悼會席上作)

### 磯の墓原

砂濱のかげの墓はら四邊にはちかく家むらも  
見えざりにけり

濱かげにくだれば鹿籠はかくれたり濱の水ぎ  
はの夕日墓原

鹿籠の街出づれば濱の夕づく日渚道より駄馬  
上る見ゆ

夕濱に松二三本の小墓はら小徑はとほるその  
墓原に

おのづから足疲るればゆふづく日汀におりて  
草鞋をしめす

わたつ海の入日を受け赤き濱あらはにな  
らぶ小墓かなしも

あかあかと夕なみひたす渚べの静けきものに  
竝ぶ墓原

渚にて聞けばさみしも物を言ひ磯墓はらを入  
通るこゑ

旅にして小墓のならば和田津海のゆふ日の磯  
に物念はざらむ

ゆふべ風吹くべくなりぬ然すがに薄ともしき  
磯の墓原

いにしへもこの夕濱をわが如く旅ゆき暮るる  
人のありけむ

夕ながら鹿籠の山野を越えんとす夕日に染み  
て磯をいそぐも

磯礫の啼く音をさきぬ日のくれに浦回急げば  
くらき岩間に

日くるれば浦わ寂しき潮騒にひと眠るべしや  
小磯の墓に

(数年前の南薩旅行記より。三月作)

## 雉子

春雨のこの降る雨の木がくりこに雉子啼きくなり  
遊べるらしも

ゆふ尾根おに遠く雉子の啼きたるは楷枝しがくり  
に相逢あふならむ

ゆふ山に雉子啼きやみぬ雨のなか谷みづを飲  
みに下りにけらしも

雨ごとに雉子の徑みちのわなの木の芽を吹き緩ゆるむ  
春さりにけり

春されば雉子啼く夜の山のさと我家わがに婦つとを卒ひ  
てかへりねむ (三月作)

## 紅梅の門

かつらぎに我がゐねし家の海ちかき門の紅梅  
咲きにつらんか

往來びと春は立ちよる妹が門の古井のうへの  
紅梅の花

我妹子と小夜の降てばかつらぎに海べへ去り  
し鴨啼くきこゆ

みんなみに倉戸を建てて七戸前うべいにしへ  
もうやうやし君

月の夜の蓑島へ行く人ならん陸のつづける野  
をわたる見ゆ

(二月三月作)



蟬

宵あさく窓あけ居れば端ちかみ白き小床せどこにいとど上るも

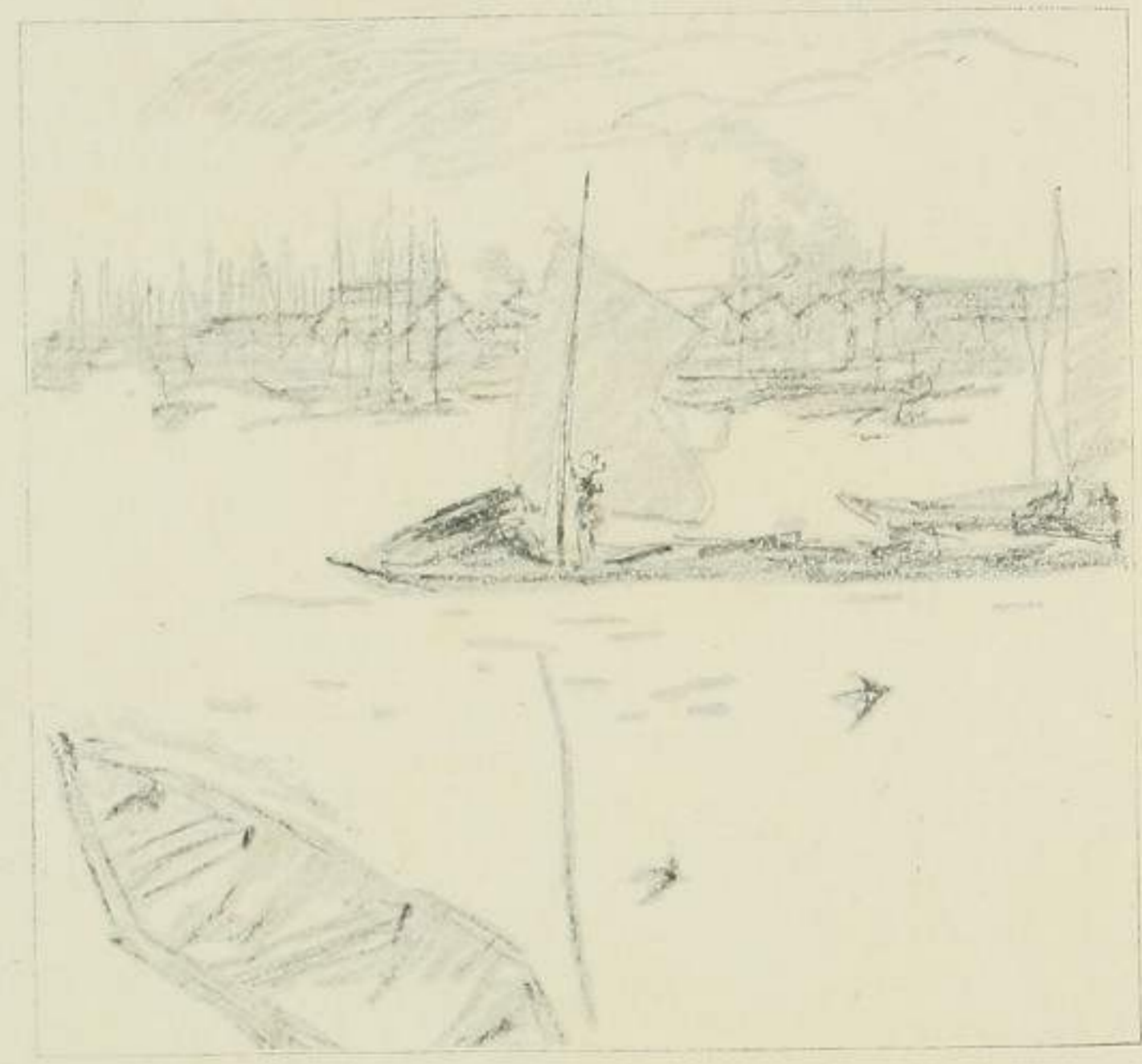
床にくる蟬いんとはいまだうら若し小床の皺をのべてかなしも



蟬

宵あさく窓あけ居れば端ちかみ白き小床カドコにい  
とど上るも

床にくる蟬カマキリはいまだうら若し小床の皺をのべ  
てかなしも



大  
正  
四  
年

構橋晩景一

大<sup>おほ</sup>河<sup>かは</sup>口<sup>ぐち</sup>の夕<sup>ゆふ</sup>焼<sup>やき</sup>がたの船<sup>ふね</sup>工<sup>こう</sup>場<sup>じやう</sup>音<sup>ね</sup>をやめたりその  
重<sup>おも</sup>きおとを

河<sup>かは</sup>口<sup>ぐち</sup>の船<sup>ふね</sup>工<sup>こう</sup>場<sup>じやう</sup>に起<sup>おこ</sup>重<sup>じゆう</sup>機<sup>き</sup>の音<sup>ね</sup>あがりてより日は  
久<sup>ひさ</sup>しくありけり

煤すすけむり河になづさふ夕づく日構橋ひらけりのしたに  
帆の船來る

ひろびろと河の口より夕映ゆふばえす構橋ひらけりにちかづく  
大き帆のかけ

ひろびろと河の口よりゆふ映す橋のたもとの  
路樹ちみぢ一本いっぽんに

ひろびろと河の口より夕ばえす橋に向きたる  
街まちの遠とほくに

ゆふ映の街のはしより海の見ゆとはく橋見ゆ  
その海の島に

夕づく日構橋のなかを行けりしが我が足もと  
に帆を卷く音す

橋したの夕忙しき水のうへに小蒸汽船は来て  
とまりたり

しまらくは構橋したの小蒸汽船より街衢にの  
ぼる油煙の臭ひす

橋詰の街樹に吹ける海のかぜ夕かたまけて風  
ぎにけるかも

## 二

いつくしく海のゆふ映す橋づめの一本路樹に  
ねむる籠鳥

橋づめの路樹に籠どり眠りけり海より吹ける  
風のゆたかに

永代橋はしづめの樹に文鳥の釣籠ひとつ暮れ  
にけるかも

構橋に電車のおとの繁くなれり大河口に灯の  
いろは濃く

夕ざれば馬車灯をつけて構橋のかげ黒きなか  
を近くくる見ゆ

千鳥橋

倉庫堀に小夜潮ふかしわが眼透し眼にみるも  
のが白き架け橋

黒ぐると倉庫のあはひの隠り船しはぶき一つ  
寒けかりけれ

倉庫かげに夜ぶかくこもる堀おほみ漕ぎ出で  
來る灯火荷船

倉庫竝の堀のおくがへ夜ごもりに入り行く船  
の水棹のおと

河岸倉に人のまだ居る聲さむし岸にみちたる  
さ夜の潮香に

河岸船に天窗あきし灯のあかり女のぞきて物  
を云ひつも

さ夜ふけの星居幽けぎ千鳥橋他の橋へうつる  
寂しき人か

假り橋を來る老婆あり夜の目には太葱一ぼん  
手に持ちしるし 二月作



## 倉庫街

深川ふかがはに夜よるを來つれば街ひくし潮かぜをおぼゆ  
 近くの空に

とつぷりと日暮れの後の倉庫街馬ひとつ居て  
 尾を振るあはれ

倉かげに馬は暗しもしみじみと尿いばりを終へて蹄つめ  
 の音すも

馬ひとつ静かにくらし吾がくれば吾れに口寄  
 せ嘶なかぬ愛かなしも

倉庫堀壁のさわには潮ふかしくらささむさに  
 千鳥も啼かず (二月作)

## 晝の燈

日にけに光をふふむ風ふけば息なやましく夏  
 さりにけり

吹きなやむ青葉のかげに晝の燈の滲みて黯る  
 夏さりにけり

うとうとと眼にはおほろに光るもの藪の上を  
 吹きにけるかも

目並べてみんなみ甚く吹きぬれば思にあまる  
 物言ひにけり

思ひ出て幽かにねたむ葉がくりの晝の燈光の  
 顯しけなくに

樹のかげに晝の燈にぶし熱き葉の匂ひを嗅げ  
ば息はづみけり

憤るころすなはち恥ぢにけり眞晝かがやく  
大道をあゆむ

みなづきの光眼いたし大道に鱗をころす鳴き  
こゑ聞こゆ (六月作)

### 草木發芽

花ぐるま路地にかくれて朝ながに鉄おと澄む  
春たちにけり

火車あるは近くあらしも電車とまる街の灯な  
かに烟臭しも

街なかの濕り空地の草間にも土筆の萌ゆる春  
 さりにけり

試験すみし書物たまりて堆し机のつばき散り  
 居たるかも  
 (小閑を得て詠める歌五首)

わが眉に試験疲れの皺ふかし小夜更けてひと  
 り鏡を見るも

尠くも障子開くれば庭のものみな葉となりて  
 居たりけるかも

小庭べに若芽ひらくはすくなくも半日待たね  
 ば心憎しも

双眼鏡もて遠窓見れば心ぐし木の葉こまかに  
 灯を蔽ひ居る  
 (四月作)

峽の晝

やま峽の水くみ車田のなかに水こぼす間も物を思はしむ

田のなかに小屋ひとつありて山ちかし朝なさな見れば南瓜咲きつも

山の根へ青田のうへの風の筋はそぼそと通ふ眞ひるなりけり

鳴きしきる藍草のふかみのさりぎりす深く染みにし戀ならなくに (三月作)

五月雨をあはれと思ふ内の海ふるき湊に女見に來れば (五月作)

## 悼左千夫翁

大正二年七月三十日深更、左千夫先生死去の電報千極より來り、驚嘆措かず。遠く郷里にありては衷心より之を信するを得ず。ひとり裏座敷にこもり、川を隔てし青山に對して靜に思ふ時は、昨年來先生にこの悲しき徴候なきにしも非ざりしなり。

何やらん心重たく突きつめて思ひて居れば風  
のかなしさ

向山の樹の間に何の花ならんこの夕かげに白  
く咲けるも (八月作)

大正三年。六月。若葉漸く更け梅雨期に入りて陰鬱なる曇り日續けば、同人の間にはおのづから先生の追悼談多し。先生の肥滿せる肉體を思ひ出でつつ

口ならべて膚にねばむ曇りかぜ居ても堪へじ  
も亡き人思へば

大正四年。七月二十五日。炎熱。龜井戸普門院にて三週忌  
法會。墓參後。鮎屋追悼歌會席上作。

潮あさき枕橋まくらばししたに船とまり心忙せきをれば橋  
のほこりすも

遅れ来てまづ眼めに入るもの墓めちかきあささの  
溝みぞが正まさに悲あはしむ

眞夏まなつ日の墓めべの溝みぞにわく泡うぶのふつふつとして  
静しずこころなし

よく見ればあささの中に蛙か浮うき寂さびしくひかる  
墓めべの溝みぞに

大正五年七月十三日。小石川區上富坂發行所開催第四  
周忌歌會席上作。この日天久しく曇りて殆ど無風。予に  
は左翁の死は不思議にも蒸し暑き曇を聯想せしむ。夜  
半に至りて大雨來る

曇り風ふみ月の風は吹けれども土にさみしく  
君が音ぞせぬ

くもり風うつつに吹きて居るゆゑにことごと  
く物の音の遙けさ

曇りかぜ氣遠く吹けどしかれども土は寂しも  
ひと甦らんや

新  
月

夜ふかき月は隠れて新づまの離室のこ戸に渡  
るかしこさ

夜ふかき月はかくれてわが大君夜の御典につ  
かへますらむ (十一月十四日)



浅宵裸馬の列

灯な  
かより埃ののぼる宵浅し十字街にくれば  
汗ながれけり

灯のなかを遠く疲れて行くならん浅夜の辻の  
裸馬の一行

馬の居る灯の美しき夏の街馬はとほくに送ら  
るるにかあらむ

列りて行く馬みな裸馬なりほこり立ちたる灯  
のなか行くも

つらなりて浅夜のつじを行く馬のあらはなる  
背は寂しかりしも

いななかす裸馬のひと群とほりしが埃にはふも街のあかりに

辻のへの燈火のなかを疲れたる馬の太頸並びゆく見ゆ

馬のむれの馬の一匹立ちとまり街のあかりに埃掻きけり

十字路の灯なかを過ぎる馬の列腹に射したる灯のいろの見ゆ

ありありと遠き灯つづく十字路に馬とどまりて面大きなる

灯のかげに馬のおもわは疲れたり馬眼をとづる息のふかしも (八月作)

## 寒潮堀

夜くらし深川不動尊境内に潮風ながる裏の堀  
より

縁<sup>え</sup>日<sup>ひ</sup>の人ごみの中に灯<sup>あかり</sup>はくらし潮風著<sup>しる</sup>く吹き  
にけるかも

大正三年

眉間の光

新芽立つ谷間あさけれ大佛にゆふざりきたる  
眉間のひかり

夕まぐれ我れにうな伏す大佛は息におもたし  
眉間の光

暮れそむる浅山あさきやまかげに大佛おほいそとの膚肌はだはあをく明あき  
からんとす

大佛おほいそとの乳見ちちみそむれば松まつの間まが眼まなこにわづらはし  
松葉まつばこまかに

大佛おほいそとの肩かたのうしろにおのづから浅き夕山ゆふやま沈しずみ  
たる見ゆ

ゆふ月の赤くながるる谷やまつべに奇しき今宵けふの  
露佛つゆぶつのひかり

月赤く谷やまにのぼりぬ大佛おほいそとの慈顔じげんの横よこを匂におほは  
さまくは

このゆふべ月つきをやさしみ去さりがてぬ赤く照あり  
たるほとけの谷やまを

戀ひしけば月さへ赤く身に匂ひ世には再びと  
生れて來んや

赤き月谷に梟の啼きやめば思ひわが入るうつ  
し身はなく

五月八日。全國一體に亘りて日月その色を變ぜりと云  
ふ。原因不明。予時に鎌倉にあり。夕方ふかく思ふ事あり  
て一人大佛の谷にさまよひて私に月の赤きをかなし  
みければ。後ちよめる歌

蒼き海

旅やどり夕なりしかば幾重にも遠白なみの渚  
は蒼く

はかな言ゆめうつつには信ぜねど在るにあら  
れずあをき潮騒

ゆふ蒼しなきさの浪にあげられし微温き玉藻  
を取りて嘆くも

潮騒のゆふ香はぬるく身をそそれ戀ひじとは  
すれどなきさ潮さる

夕濱の異國旅人の夫婦づれ歩みしたしむ落し  
ら波

白なみの蒼きなきさに消ゆらくはかなしき世  
には戀を思はじ

潮かぜの夕かぎりなき沖つなみ眞帆ただ一つ  
ながれて行くも (五月作)

## 新緑の海岸

はしけやし葉山茂やま日のひかり海に迫りて  
夏ならんとす

磯べには黄ばめる麥へ藻の香吹きゆたかに吹  
きて夏ならんとす

このゆふべ山にて聞けば麓田に麥藁を焚く音  
のま近かさ

新みどり濃き谷底の一枚田このゆふかけに田  
植ゑる見る見ゆ

夏さらば木ぬれも繁に松雀らがちつと隠りて  
鳴く日多からむ



この浦の垣根かきにおほき珊瑚樹さんごの赤らみ初めて  
われ去らんとす

松の芽の匂ひにおに生るる我が待ちし螢も見ずて  
わが去らんとす

今日もまだ雨の岬みさきの森かげにとまりの舟の煙  
立てをり

宿かへて錢ぜにやや乏しおぼつかな向うの岬みさきに蟬  
の鳴き居り

移り来ていくだもあらず春蟬はるせみは岬みさきの松におと  
ろへにけり

しみじみと眼まなこかなしも松の間に日の染む草を  
踏みて來れば

砂のうへに夕あさりゐる鳶とびのむれ間まなく時な  
く浪しぶき居る

岩にゐる鳶のひかりに南かせながく吹きつ  
つ海は青しも

夕ちかき濱に人ゐず立ちいでて南のかぜを怡よろこ  
びにけり (五月作)

篠懸樹のかげ

篠懸樹ささかけかげを行く女をんなが眼蓋まぶたに血しほいろさし  
夏さりにけり

街の灯あかりの暮れなづむ頃の蒼き靄かげはだへに粘ねむ  
夏さりにけり

梅雨ふかき小庭の草に簇りて鳳仙花のくき赤  
く生ひけり

夕べかぜ木したに吹けば擬寶子草あまた光り  
て廣葉をもたぐ

さ庭べに最もおそく芽吹きたる合歡によるし  
き夕雨ひかる (六月作)

春 霜

春霜の溶けて流らふ光より國べをいでて來ん  
と云ふかや

曙のひかりを踏めばほのぼのと生きたかりけ  
り息の緒かけて (四月作)

## 松の芽

小松原つばらに入ればひと戀しみどり更けた  
 るこの匂ひはや

萌え出づる松のみどりのつぶら玉赤きを見れ  
 ばかなしく思ひし (六月作)

## 梅雨渚一

海を隔てとほき箱根はこねにおつる日の雲よりこぼ  
 れ濱のあかるさ

足もとの磯を染めたる夕づく日泡沫うたかた赤く生あれ  
 ゐたりけり

静くもる夕なぎ海のふくれ波足べに寄れば音  
のかそけさ

おもむろに磯におちたる浪の音ゆふ風ぎ海の  
潮のふくらみ

かくのごと潮ゆたかなる夕磯には大海の大魚  
も近づきぬべし

潮よせて砂地ともしき築石垣にあかく震へる  
晝顔のはな

つつましく夕餉の飯を欲しけり渚とほりて潮  
香の湧けば

外洋にむかふ海べの旅宿に悔しさつづき夜々  
の潮なり (五月作)

## 二

海宿にひとり暮して二十日なり五月雨の雨と  
なりにけるかも

電燈の蓋に蟲ゐる小夜ふけて外にしづかに雨  
ふる聞こゆ

雨ながら背戸の濱べに蟲鳴けりあはれと人に  
告げやらましを

灯のもとに日の疲れ出てうら悲しかなしき人  
に告げやらましを

雨冷ゆる濱べこほろぎ今われは悲しかれども  
省にけり

裏濱うらまに小寄せこよせに寄せし夜の浪は遂ついににあらしと  
なりにけるかも

濱まべには雨やみたらし然れども潮なみいまだ  
轟とどろきやまず

居ゐひそみて見れば悲しも森かげの暗くらき磯いそより  
浪なみ立てり見ゆ

新月あらげはとほく小暗こくらくなが濱まの小松こまつがうれへ落  
ちゐたりけり

雨あめながら風かぜぎたる海うみに幾いくすぢの水脈みづなでは浮うきつ  
つ遠とほく舟ふねなし

五月雨ごごの潮香しほかふさくる海うみの宿しゆく二階にがいの窓まどのくれ  
なるの花

月更けて艦<sup>かん</sup>かけ黒き港より風ひやびやと潮香  
吹き居り

曉<sup>あけぼの</sup>に近づく海は暴れながら遠風ぎの星現れに  
けり

海岸<sup>かいがん</sup>の暴風雨<sup>あらし</sup>のあとの松原にしつとり下りし  
潮香かなしも (六月作)

舟の音

靄<sup>もろ</sup>ふかく暮れゆく海のしらみより我がまへに  
来て大き帆のかけ

ゆふ靄<sup>もろ</sup>の磯のしらみに帆をおろす船のおとこ  
そ静かなりけれ



しらじらと靄は吹き來も磯の海帆をおろした  
る帆ばしらの影

磯海の靄のふかきに人の影水にくだりて動く  
静けさ

靄こめて暮れゆく海の沖の島楮土の山ほのか  
に見ゆも (五月作)

### 洲崎附近

ひつそりと雨ふる道の寒さより牛鍋の香の匂  
ひたりけれ

はるばると梅雨の巷を來はてたる海べ寂しも  
廓あらはに

廓越し海は見えねど白じらと雨ふる空が近く  
見ゆるも

廢れたるごとき廓のひそか雨うみ鳥は下りて  
路に飛べるも

白さかぜ海より吹けば三味線がくるわに鳴り  
て寂しかりけれ

五月雨の海かぜ白き廓みち柳のかげを來る人  
もなし

鐵門のなかに柳のちまた見ゆ海べの廓の外を  
とほれば

梅雨ふかき廓にそへる堀のみづ芥を浮けて潮  
香かなしも

二階には雨戸とぢたる細目より赤き遊女の覗きけるかも

紫陽花は塀にのびでて咲きゐたり昨夜は遊女の眠りつらんか

塀のうへに竝ぶ花たま紫陽花はしぶきの雨に揺れるたりけり

海ちかく都のはての暇みち雨ひそやかに行きにけるかも

粗朶垣の細手路行けば梅雨ふかし貝殻しるきその粗朶垣に

養魚地の梅雨深みかもしつとりと岸の無花果樹葉を浸したり (三月作)

鏡  
壁

木がらしは外にはげしも夜ふけて寒くもの食  
ふ珈琲店のなかに

夜の珈琲店かがみの壁に燈はふかし食卓白き  
なかより對けば

眞白き夜の珈琲店はささやかに我が皿の音に  
更けゆく悲しも

夜ふかき鏡のまへに酒のめり我れの眞顔の何  
か悲しき

階上にをれば悲しも下とほる人とほくうつる  
鏡のかべに

珈琲店の夜はふけつつ針のおと時計ひびくも  
かがみの壁に

兩壁の鏡のそこに燈はふかし夜の更けゆく氣  
はひ知れずも

燈のあをき鏡壁のそこにをんな來る氣はひは  
暗く動き居にけり

鏡なる女を見ればをんなの眼あわててひかる  
その暗がりに

鏡より迫るをんなの紅き口なにか云ふかと慄  
きにけり

食堂のもの皆あをく火穂の立ちしんと燃えた  
る真夜なかあはれ (三月作)

## 四日月の光

四日月の光を暗し庭べに立てば堆肥のには  
ひ寄せくも

あをき星水田のそこに揺らぎつつやや春めき  
し風ふき来る

東京の灯あかり遠し水田には四日月の光やや  
寒きかも

汽車おりて街あらずけり川土手の一軒旅籠に  
闇路を行くも

土手したの水田のうへの夕びかり老いのこり  
たる蛙のなくも (二月作)

小夜ふけて深くひそめし人づまの命にふれて  
 恐れたりけれ (深宵二首)

電燈は照りてうごかね球のべに震ふ灯ほどの  
 うたがひ消えず

畝火嶺に遠眉かくる新月の新づま枕くに君が  
 よろしき (十月、新婚の友)

### 峽驛の葬禮一

山峽のふる宿驛にあをあと山は蔭るふ軒に  
 ひそかに

人住みてすでに古りけん峽驛の軒べに近き青  
 山見れば

峽ふかく古驛はひそめ葬列の今日はたまたま  
出るかあはれに

ほのぼのと柩をおくる笛ならめ紅きかぜ軒を  
とほりたりけり

峽驛にこの鳴る笛の音をきけば染みる覺はゆ  
その青山に

## 二

宿驛みち山ひかりたる向うより葬列の旗竝び  
來ぬるも

葬列のぐんじゆうの顔日に向きて驛路をきた  
る赭く眞面目に



わが傍のしづ日あたりをとほりつつとぶらひ  
の匂ひ冷めたかりけり

葬列を道端におくる婦女どもみな日に向きて  
泣きつつ居たり

日に向きて彼女等のながす涙には生きの光の  
あれや愛しも

山峽のあをきに浸りわが居れば廣きひかりを  
戀ひざらめやも

とぶらひの行きて曲れる宿はづれ峽の戸口へ  
道はるか見ゆ

うまや路の屋竝みの上の山畑にとぶらひ出で  
てのぼりゐる見ゆ

とぶらひの幾白旗は山のべにたゆたひにせし  
が今は入りにし

葬列は山にかくれてやや久し峡間に高き日の  
ひかりかも

葬列は山にかくれてやや久し峡間にふかき山  
の色かも

## 三

今日もまま旅人すぎし峡間には日のしみじみ  
と暮れるたるかも

背戸に出たかく峡間をあふぎたり日は入り  
方の空澄みわたり

向<sup>むか</sup>ひ山と<sup>やま</sup>ころどころに日の影が木<sup>き</sup>ぬれに浮き  
て暮<sup>くれ</sup>れ居<sup>ゐ</sup>たりけり

峡<sup>せき</sup>のそこ寂<sup>さび</sup>しき河<sup>が</sup>のひと筋<sup>すぢ</sup>にぼつねんと住<sup>す</sup>み  
て逝<sup>し</sup>きにけらしも

千代<sup>ちよ</sup>かけてこの谷底<sup>やみ</sup>のさみしさを悦<sup>よろこ</sup>びに似<sup>に</sup>て  
死<sup>し</sup>行くもあらむ (三月作)

馬<sup>うま</sup>柵<sup>せき</sup>の霧<sup>きり</sup>一

おく山<sup>やま</sup>の馬<sup>うま</sup>柵<sup>せき</sup>戸<sup>と</sup>に<sup>く</sup>れば霧<sup>きり</sup>ふかしいまだ咲<sup>さ</sup>き  
たる合<sup>あ</sup>歡<sup>わん</sup>の淡<sup>たん</sup>紅<sup>こう</sup>はな

こんこんと馬<sup>うま</sup>柵<sup>せき</sup>をくぐる水<sup>みづ</sup>きこゆ草<sup>くさ</sup>の中<sup>なか</sup>より  
霧<sup>きり</sup>立ちながら

草のなか馬棚をくぐる樋のみづ霧りて隠らふ  
他の山垣に

山がきに咲く合歡見れば霧のなか淡くれなる  
の秋さびにけり

わが眼には濃霧つめたし幽かなる合歡のはな  
には霧すぐる見ゆ

しかすがに諸葉をとちし合歡の木の花より霧  
の更きゐる見ゆ

おく山の馬棚戸に咲けば合歡のはな人もくぐ  
らん花の下あはれ

霧ながら明るく濡れし馬棚の戸を鎖して入れ  
ばふかき松山

朝やまの馬ま棚せ戸とにほどく黒か蔓つ葛ら解ときなづみた  
り霧のしづくに

馬ま棚せうちちに泉いかあらし木こ深ぶみの草くさよりおほく  
霧きり立てり見ゆ

霧きりらひつつ草くさにこもれる水みづのおと草くさにはゆら  
ぐなでしこの花はな

露つゆふかく撫な子このはな摘つみしかば狭さ霧きりはのぼる  
そのふか草くさに

朝あさくらしき林はやしを行いきて聞ききにけり繁さかく木こづたふ  
霧きりの雫しずくを

森もりのなか朝あさ来て見れば草くさむらのいづみに沈しづむ  
白しろ飯いひのつぶ

山ふかく馬も来て飲む草いづみ朝湧くみづは  
おほく思はゆ

林中りんちゆうに夜なかも湧きとおほき水草根すいそうこんに漬つきて  
朝霧ふかし

霧さむし林のをくに手をひたす草のいづみは  
未だぬるみたり

## 二

朝はやく松ふかけれど動きつつ霧はあかるむ  
松のおくがに

あさ鳥はいまだ啼かねど霧ふかき山にはすて  
に人の居るこゑ

朝きりに樹の香しみたる馬柵のうち冷めたき  
朝を入り行きにけり

松の間に霧のしづくは繁けれど馬二つ寄りて  
嘶かず立ちけり

霧ふかき馬柵のうちは静かなり馬ふたつ口を  
寄せて擦りぬる

松の間に秀枝の霧はくだれども人ごゑ深し草  
のおくがに

霧のなか日の射しくれば松の樹の匂ひは高く  
なりにけるかも

眼のまへに草山たかし朝づく日狭霧のなかを  
鳥啼さわたる

## 山の霖雨

向山むかやまにしろく咲きたる栗栗のはな雨ふりくれば  
句ひ來るも

梅雨つゆふかき山べにちかく家居いければいく日のの  
ちに家あかるまむ







山の霖雨

向山にしろく咲きたる栗のはな雨ふりくれば  
匂ひ來るも

梅雨ふかき山べにちかく家居ればいく日のの  
ちに家あかるまむ

山峽夏雜詠

朝霧の峽間はざの驛えきの屋やなみには白壁しろかべもみゆ山も  
かみかも

霧ふかく坂さかになりたる舊街道ふるかど朝みづ汲きみての  
ぼるひと見ゆ

向むかひ山日かげとなれば心こころがなし人かよふ見ゆ  
その山したを

夕ゆふまけて風ひやびやし峡せきのそこ瀬せ音ねたち來も  
裏うらの小川ゆ

さ庭にわべに往ゆき來きをやめぬ蜻蛉せうらゐて白壁しろがきのうへ  
に夕日ゆふひ移うつるも

梅うめ木のした夕ゆふかげ草くさにふかぶかと白しろき鷄とりはも  
ねむりたりけり

やうやくに憂うれしと思へば夕庭ゆふにわに風吹かぜき入りて  
もる葉はよみがへる

宵よよひの峽せきにふかき天あまの川がは眞まうへに澄すみみて秋  
ちかみかも

星ひとつわけて涼しき宿驛路の向うに山の影  
大きなる

山かげに宿驛路くらし一つづつ灯火消えて夜  
は更けにけり

夏の夜をこの峽ふかく旅の人行きやめざらむ  
星の明りに(九月作)

街上雑詠

變電所灯なかのものの唸りより夏夜の街は明  
け易からむ

夜あけていくだもあらず街の上は吹く風すて  
にぬるみそめけり

街の上に燈影のこりて幽かなれ人ひとり来る  
朝影さびし

しののめを眼ざめて聞けば遠電車歌ふごとく  
に近づく聞こゆ

埃ぼく街の日向に工夫居りかたまりて飯をし  
て居たりけり

ちくちくと午後の日照れば店頭のもの類  
光りそめたり

さむざむと雀いる時かはたれの街衢をひと等  
忙しく行くも

街はしる電車のひびき夕さむく時に遠退く疾  
風過ぎつもの

街かげの夜ふかき堀のおくがには橋かあるら  
し灯のとほる見ゆ

街つちに曇り朝あけ鈴さむく新聞の賣子立ち  
か出づらむ

霜ぐもり自転車ひとつ米袋をさむく脊負ひて  
とほ去りにけり

代々木野のけむる光に走りたる自転車はやし  
光り消えつつ

雪解みち蒼く暮るれば街をゆく靴のかかるとに  
氷り初めたり

崖下の街にかなしく赤子なく宵のしづみを雪  
降りしきれ

## 病院の庭

流らふる光に出でて東の間もかなしき息を衝  
かんと思へや

悲しさは日の明るさに疲れつつ人をいとひて  
來し心かも

樹に滿つる光を見れば清稚きをとめのいのち  
死なすに堪へんや

彼の息のつひに死ぬかと陽炎のかなしく立つ  
を眼より離さず

繁り葉の頭にさやる徑に入り鳥のこゑにも涙  
ながすも

面ほてり深くねむれる子をみれば被衣かづきのうへ  
に涙おちけり

唇はものも言へなくおのづから死に近き眼めに  
涙はひかり

泣きながら母と我れとは病室びやうしつのせまさ疊かさねに夕ゆふ  
餉けせりけり

くもり日の何か細かに降るものの身に來き觸ふれ  
つつ消ゆる悲しも (歸路六首)

曇りふかし巷ちまたのうへに仰もちぎたる日輪ひろはとほく  
少さかりけり

汽車に乗り人目ひとめをかねし我がなみだ眼をぢつ  
ととぢてながく堪へし



悲しみに堪へて向へばこの友はくちびる薄し  
 饒舌りてやめず

富士の嶺にゆふ居る雲のながき雲こころはい  
 まはしづもりにけり

かはたれの驛に灯をつけ止まり居るこの夕汽  
 車は何處に行くらむ

棺 車

ふる里におくる柩をまもりつつ峽のなが路に  
 日はくれにけり

秋ふかき峽間のなかのゆふ河原待宵の花はし  
 ぼみ咲きたり

夜に入れば車のうへの風さむみ悲しなみだは  
ひとり湧きくも

峡せまふかく日は暮れたれど田にはまだ人居て打  
てる鍬影あはれ

道ばたの小戸せとより人は怪まじかりてこの棺くわんぐるま  
見送りにけり

先まき立てる母の車くるま中にすすり泣き闇やみのなかより  
ありあり聞こゆ

こころ我れにかへればかなし暗がりの耳のち  
かくに水鳴るきこゆ

朝浪のかすむ渚をほのぼのと亡なき子に似たる  
をとめ來たるも (鎌倉にて四首)

朝がすみ亡き子を思へばあはれなる玉の如くに思ほゆるかも

雨開けの海のひかりに見入りつつ眼まなこのそこに痛みをおぼゆ

銀いろに邊へによる浪よあたらしくまた悲しみの湧かんとするや (三月作)

含み言一

含まごもる少女をとめごころを餘事よごと言ことにほとほと云ひぬ憎にくからめやも

白粉おしろいのなみだに似なす霰雪あられゆきにはひやかに降ると云はずやも

おしろいの溶き水ほどの斑ら雪はだらに降れば  
 ば怨みつらんか

ちらちらと雪ふる影に見ぬふりの丹づらふ妹  
 が忘れ兼ねつもの

慎ましく瞳をおとす襟もとに街のみ雪は降り  
 初めにけり

打ちどよむ遠きみやこの灯のなかに歸りてを  
 居り戀ふるに堪へず

冬さればい續ぎいつぎに曇る日のくらく命の  
 戀ひも死なんよ

戀ひつつも例へば春のかぎろひの幻影ならば  
 悲しかるらむ

君が家の早萩のはな散り過ぎてすでにひさし  
と嘆きたらずや

おはやけに言にいはねど蓋しくもなげける言  
のむなしかるべき

ひんがしの空に開くる朝びかり必ずはあはめ  
その豫言に (二月作)

## 二

我妹子に戀ひば愛しき紅つばさ未だはつはつ  
ふふめれり見ゆ

紅つばさ唇をあくれば愛しきを人に任すが嫉  
くてならぬ

ちらちらと廻り燈籠の赤きいろ敏きにすぎて  
女嫉しも

焦るれば執着ふかし蛇の眼の赤き傷みも我れ  
は覺えし

小夜くだち獨りいらちぬ我妹子が如何なれば  
かも言絶えたらむ

ぬば玉の夜のあらしの浪の穂にひかる蟲かよ  
戀ひ現はれて

悲しみの海べの泊り夜もすがらあな息衝かし  
もよ浪のおと去らず

今の間は息もくるしき浪のおとこの苦しさを  
告げやらましを

ほかにまた或はをとこ近づきて向日葵の花め  
ぐりつらんか

わぎも子を人には告らじ光る蟲浪穂のそこに  
ぢつと沈まね

流れ藻にふるるは悲ししかれども流れて行か  
は長く嘆かむ (四月作)

## 桃

## 畑

(旋頭歌二首)

淡海路の山のはたけに桃摘むをとめ、乙女ら  
が赤きたすきを眼に戀ひにけり

足びきの山畑かぜの吹けや清さや、をとめら  
が桃の葉かげによく見ゆるらむ

## 中宿

山ふかき郷里にかへりつ中宿の町にひと夜を  
ねむるかなしさ

中宿の町にたまたま出てきたる父と相見れば  
白髪ふえけり

大正二年 (附同年前作)



ゆふべ

暑き日の日暮れとなればうら悲し倉かけに行  
きて物を思ふも

倉の戸に書きのこる<sup>まき</sup>的の墨のいろうすうす昔  
思はゆるかも

若<sup>わか</sup>やげる我が夏<sup>なつ</sup>影<sup>かげ</sup>も年<sup>とし</sup>ごとくに衰<sup>おとろ</sup>へ行<sup>い</sup>けば今日<sup>けふ</sup>  
もかなしも

このゆふべ盃<sup>は</sup>蘭<sup>らん</sup>盆<sup>ぼん</sup>燈<sup>とう</sup>籠<sup>ろう</sup>のいくつかを張<sup>は</sup>りかへ  
て何<sup>なに</sup>か儚<sup>はかな</sup>なかりけり

若<sup>わか</sup>き身の青<sup>あお</sup>山<sup>やま</sup>里<sup>さと</sup>に歸<sup>かへ</sup>り來<sup>き</sup>て家<sup>いへ</sup>繼<sup>つ</sup>ぐべくは悲<sup>かな</sup>し  
かりけれ

ゆふ庭<sup>にわ</sup>の木<sup>き</sup>蔭<sup>かげ</sup>を見<sup>み</sup>れば雛<sup>ひな</sup>の鶏<sup>とり</sup>言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>をやめて静<sup>しず</sup>  
かなるかも

曇<sup>くも</sup>り日の軒<sup>のき</sup>したくれて姪<sup>ひま</sup>み犬<sup>いぬ</sup>砌<sup>せき</sup>のうへに眠<sup>ね</sup>り  
居<sup>い</sup>るかも

腹<sup>はら</sup>這<sup>は</sup>ひし犬<sup>いぬ</sup>眼<sup>め</sup>をとぢて人<sup>ひと</sup>のごとし身<sup>み</sup>にこもる  
音<sup>ね</sup>に聞<sup>き</sup>き入<sup>い</sup>るらしも

人間のいのち悲しと知りそめて幾年ならん尙  
生き居るも (八月作)

ゆふ月夜街のはづれの墓に来ておぼるに人の  
戀ほしくなれり

墓つづき田は刈られ居てゆふ靄やひんがしの  
山に星一つ居り (十月作)

眼ざらふ夏野のなかの遠きみづ巨椋の池は霞  
みたり見ゆ

みなづきの河原あらはに山のかげ橋架くる兵  
の白き幾むれ

架橋兵石の俵を詰めるおと宇治の河原にきけ  
ば寂しも (六月作)

## 墓地の灯

夕されば畑のつかさの草のなか我家の墓地に  
灯の並びけり

弟妹等をつれて来れば愛しみ墓の立木に茅蝸  
啼くも

ほのぼのと生命の意識目ざめたるゆふ桑道の  
青の漂ひ

我がへより風立ちわたり粟畑にゆふ光こそ流  
れたりけれ

粟の葉に風吹きわたりさらさらと胸のべにし  
てやさしく鳴るも

ゆふぐれて玉蜀黍畑の葉のかげに来て佇めば  
心は湧くも

愛しくも握りしめたる玉蜀黍の幹のふくらみ  
に稚き實こもり

玉蜀黍の葉腋にのびし紅き毛のはぢらひ勝ち  
に思ひたりけり (八月作)

榛 紅葉

みちみちの山の樹の間の榛紅葉はやわが心も  
え居たるかも

妹が目のふかき情もたまなれば鮮かにみて往  
なんと思へや

わが戀は池の鯉魚の浮きしづみつぶさに見ね  
ば惱みたりけれ

けだしくも母がそばより俯伏に眼を深うして  
見たる妹なれば

その母を愛しく思へば然るゆゑにその子に戀  
ひて慎みたりしか

かはたれを我れに來向ふわが乙女やや赤面み  
ゐて憎からなくに

ゆふ庭に椀櫃のにはひ熟れるたり君によりつ  
つ然か思ひたり

灯のなかの眼近の君がつつましさ今はしみじ  
み我れ飯食むも (十二月作)

## 鳳仙花一

山峽やまがたのこのふる里さとをまだ出でずはや秋らしき  
雨を今日見れ

大き家にひとり留守留守ゐる晝の雨ぬれゆく庭に  
鳳仙花あはれ

言こと絶えてやや久なれや遠とほびとはこの降る雨に  
如何いかせるらむ

末かけて日ながくのみに言こと出でず戀こひひつつあ  
らば何時いつあらめやも

流れあめ軒のきにながれて降りやまず徒いたづらにわれを  
物思はしめつつ

し  
ら  
じ  
ら  
と  
雨  
ふ  
る  
な  
か  
の  
丹  
の  
花  
の  
あ  
り  
が  
て  
な  
く  
に  
寄  
り  
に  
け  
ら  
し  
も

## 二

鳳  
仙  
花  
土  
に  
く  
は  
し  
く  
散  
り  
る  
た  
り  
下  
ご  
も  
り  
た  
る  
葉  
の  
蔭  
の  
廻  
り  
に

鳳  
仙  
花  
葉  
立  
ち  
み  
だ  
れ  
て  
赤  
き  
花  
わ  
が  
戀  
ひ  
ご  
こ  
ろ  
み  
だ  
れ  
た  
り  
け  
り

爪  
ぐ  
れ  
の  
雨  
に  
ま  
か  
せ  
て  
か  
く  
散  
り  
て  
蓋  
し  
や  
か  
れ  
が  
忘  
れ  
た  
る  
ら  
む

わ  
か  
れ  
居  
て  
は  
わ  
が  
安  
か  
ら  
ぬ  
心  
か  
な  
爪  
ぐ  
れ  
の  
赤  
き  
土  
を  
ば  
踏  
み  
て



慎みつつ戀ふればあたら爪ぐれの餘所見の間  
だに散らずと云はんや

我がをとめ慧き仔鹿の瞳をもてり年ごろ戀ひ  
て知らざらめやも

くちびるに似てを向きたる紅きはな愛しかり  
けり青き葉かげに

莖のびし鳳仙花みればさ丹づらふ我妹に見え  
て莖の愛しも

葉がくり花の柄ながき爪ぐれは人の粧姿に  
似てを愛しも

はつはつに未だ觸れねど爪紅のゑまひを見す  
る人のかなしさ

爪ぐれは乙女のごとく首垂れて露ひかる眼を  
しのばしめたり

葉の車花にこぼれて光るだも座ろに堪へず君  
が眼を欲り

何なれば雨に眞紅に洗はれて美しきのみにわ  
が見ざるかなや

鳳仙花あまりに赤く地に見えてちりぢり散る  
は我が疾みなり

戀しけば吾がまちがたし爪ぐれの雨に堪へつ  
秋待ちがし

鳳仙花ほろほろと散るかくのごとたやすく散  
りて身をまかすかや (八月九月作)

赤  
き  
宮

松馬場をゆけば向うに赤き宮われの眼に愛し  
みわくも

松の間に愁さりけり赤き宮たかく光りて見え  
そめぬれば

廣庭を宮居へまゐる静ごころ白きひかりは降  
りぬたるかも

赤あかと岡べの宮を見れば天よりひか  
り静かに降るも

下駄はける老案内者ゐて境内をわれに近づ  
日のひかりかも

ひつそりと丹塗りの宮のなか庭に時節の蜜柑  
の熟れて明しも

松高き馬場の老の料理店おぼろ月夜に灯を閉  
ざしけり

長谷寺の厨裡のゆふべに物問へば發育のよき  
乙女が居たり (十二月作)

## 金 葉

夕づく日眼に傷みあれ樹によれば公孫樹落葉  
の金降りやます

燃えあがる公孫樹落葉の金色におそれて足を  
踏み入れにけり (十二月作)

## 鴨

四十二年作

このゆふべ背戸の刈り田の霧ぬちに鴨聞きな  
がら雨戸を繰るも

霧ながら月の照りたる刈り田にはいづらやは  
そく鴨の啼くらむ

よく見ればすぐの刈り田の月影のゆらげる水  
に歩み居る鴨

立ち聞きて暫く待ちて戸を閉ぢぬ乏しくはあ  
れど鴨のなく聲

ゆふづく日土庭の隅の塵塚にがらすの碎片の  
光りやまらずも

窓押せば鳴きわたる墓なきやみぬ灯にかがや  
きてしとど雨降る

いにしへの是れの狩場の枯尾花きたり遊びて  
ひと日暮せり

もののふの古さかり場のかれ尾花今は長くて  
胸をし埋む

胸をうづむ尾花が末は山すそへ光りなびきて  
暮れつづきけり

ゆふぐれて山をくだれば蟲のこゑ道もせにし  
て頻りに鳴くも

橘花のかほりの深さおぼる夜にひとりなやみ  
て物をこそ思へ

遠空へひとりぼつちに沈む日のあかきを見れば  
 涙ぐましも

そとに出て月に立てれば夏のくも明るき空を  
 ちかく飛べるも

白雲の山端をいづる月の夜のあかるみにこそ  
 鴉啼きたれ  
 (大正二年八月改作)

### 椿

四十一年作

さやさやし庭檜が枝の朝の風ここだ露けく椿  
 散りぬる

落つばき珠に貫きつつ寺庭にあそべるとき  
 の  
 妹ら思ほゆ

みち道の椿の花を摘みなづみ蜜を吸ひつつわ  
 が行く山路

しみじみと日の降る屋根に人ひとり紺に匂ひ  
 て粉茸さゝるるも

春の日の門に枝垂りし孟宗竹はしづ揺れつつ  
 も永く暮れずも

今朝見れば刈り揃ひたる女竹垣にすがすがし  
 もよ斑れ雪ふり

梅の花うす黄がふふむ淡雪は手につむからに  
 匂ひて消つつ

浴室の窓よりみれば湯気のうち紅梅のはなに  
 散らす雪かも



山くぼの畑はたけのなかの茅家ちやうやをかくむ白梅日は暮  
れんとす

茶垣ちやうがきより二本ふたもと立ちし枇杷びわの枝えだは厠かほの軒のきに片枝かたえ  
咲きけり

向山むかやまの青葉あおばしげ山みて居ればかすかに木の葉  
動きて居るも (天正二年改作)

柑橘かんきつの庭 四十二年

柑橘かんきつのあかるく熟うづれし奥庭は雨ながらひる戸  
を鎖かぎしたり

庭の樹に雨繁あめしげ吹きつつポントンが折をり光る  
その葉の中に

にはたづみ流れてくればポントンは擦りがて  
に揺る風にもまれて

ポントンの枝ひくければ黄金だまあらしの雨  
に泥はねにけり

手水鉢に雨水満てばおのづからポントンの實  
が浸りたりけり

あをあをし椿の垣にポントンの實は埋れつつ  
大きく明し

雨のあと散り葉の青が砂庭にここだく悲しみ  
な泥ぢながら

麻の香 四十二年

月照らす麻野をひくく飛ぶ鳥のかげの消えゆ  
く野末かそけさ

あばしまに月の麻原見て立てば原の裾はるに  
低き山かすむ

月清し廣麻畑のふかみより人語り行くこゑぞ  
きこゆる

かぜ吹けば三次麻野の千葉ゆらぎ葉うらが白  
く立つ浪のごとし

麻が香をゆたかに含める朝霧を胸うち開けて  
飽かず吸ふかも

霧ふかく濡れたる麻の畑はたけよりいささ朝かぜか  
ほり高しも

林 泉 集 終

卷 末 小 記

○本集に收むる歌數五白六十一首は、概ね「馬鈴薯の花」(大正二年六月刊行)以後の作である。内未だ一度も世に發表しなかつたのが約百首ある。「馬欄の霧」「梅雨落」「霧の海」「棺車」「四日月光」等がその主なるものである。古い手帳から探し出して多くは、本集を編む際に改作した。其他に未だ明治四一二年頃の作約三四十首(卷末の「鴨」以下四篇)をも收めてあるが、之は元來「馬鈴薯の花」に採録すべき筈の歌である。同集に編み漏した故改作して後に諸誌に發表した。今改めて之を本集に入れるのは、聊か氣後れしなないでもないが、併し自分の現今の作と最初期の作とを對照し得る便利もあ

るので、矢張り棄てないことにした。

○初めの心算では、本集の巻末に於て予の短歌の系統由来について聊か記しておきたいと思つて居たが、急に歸國の用を生じてその際もなくなつて了つた。唯だ若し予の歌に見るべき所があるとすれば夫れは故人で伊藤左千夫、長塚節、堀内卓造の諸氏、同人で、島木赤彦、齋藤茂吉、古泉千樫の諸氏並に平福百穂氏等の志厚い鞭鞭の結果が現れて居るのであらう。前記故人の三氏にこの集を讀んで頂けないのは返すがへすも遺憾である。

○次に本書出版については、直接間接に前記同人四氏、ほか山田邦子、高木今衛、木曾馬吉の同人諸氏の厚志を得た事と光風館四海民藏氏、森園天涙氏、友人天野彦三氏の異常なる

同情と盡力とを受けた事を特に記して感謝せねばならぬ。平福百穂氏に至つては忙しい中を本集の挿繪装幀のために特に骨折つて頂き恐縮と感謝とに堪へぬ。内「湖の女」は同氏の本年の文部省展覧會出品「田澤湖傳説」の下繪を頂いたもので此の上もなき記念となつて誠に歡ばしい。今この機を以て諸氏に深く御禮を申上げる。

○終りに、本集の再校正以下製本に至るまで、全部自分が携つて居る事の出来ないのは残念である。残務を處理して頂く四海、森園兩氏、アララギ同人諸氏には重ね々、恐れ入る次第である。

○郷國では予の幼時から愛撫を受けた外祖母が危篤に瀕して居る。予も勿々校正の朱筆をおいて歸らねばならぬ

い。折からこの半月に亘る不順の寒雨に迷つて寓居庭前の山茶花はつゞ／＼に花を開きはじめて居る。この惜しい時を今から予は出發歸國せねばならない。大正五年十月十二日正午、牛込横寺町の寓居にて著者記す。

大正五年十一月二日印刷  
大正五年十一月五日發行

定價金九十錢  
郵税金八錢

歌集
林泉集
奥附

發行所  
發賣所

東京市小石川區  
上富坂町二十三番地  
東京市神田區  
裏神保町六番地

光風館書店  
ア ラ ギ 發行所  
振替口座東京二八三四三  
電話本局二〇三二七九  
振替口座東京三二七九

著作	東京市牛込區横寺町六十四番地
發行	中村憲吉
印刷	東京市小石川區上富坂町二十三番地
製本	久保田俊彦
	東京市牛込區榎町七番地
	渡邊八太郎
	東京市神田區表神保町七番地
	小川由次郎

